

南相馬市地域課題・解決調査研究事業
「東北と日本の未来プロジェクト 2019 in 南相馬」
報告書

2020年3月13日
成蹊大学ボランティア支援センター

1. 背景

成蹊大学ボランティア支援センターでは、開設2年目の2015年度より2年間、年間テーマ事業として「東北復興スタディツアー in いしのまき」を「現地の方々との交流を通じて、私たち1人1人が震災を捉え直し、これからは何が出来るかということについて考えるとともに、現地で学んだことを周囲に向け発信し、今後の東北との関わりや、防災・減災の意識の向上につなげることを目的に掲げ、支援事業を実施した。

2017年度は、日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との協働事業とし、「復興・創生プロジェクト事業」と銘打ち、「東日本大震災を「東北の問題」だけではなく、日本全体の問題として考え、さまざまな社会問題を「じぶんごと」として捉え、問題に対し自発的にアクションを起こすことのできるきっかけを提供すること」を目的として実施した。続く2018年度は、それまでの成果を基に、「東北と日本の未来プロジェクト2018」として展開して福島県の再生に向けての問題や課題を学習し、「東北の現在を見て学び、未来を考えることが、自分たちの住む地域や地方、あるいは日本全体の明日の課題を解決する糸口になる」ということに気づかせることを目的として実施した。2回の福島県訪問で、学生たちは「風評被害」と「高齢、過疎化」について研鑽を深めた。

2019年度は、新たに南相馬市地域課題解決調査研究事業の補助金を活用しプロジェクトを行うこととした。

南相馬市には東日本大震災で強制避難区域に指定された地区があり、強制避難が解除された今でも、その地区では以前の人口の4分の1しか住民が戻って来ておらず、しかもその多くは高齢者が占めている。このような状況で、過疎化、高齢化は南相馬市全体の大きな課題となっている。そこで、2018年度のプロジェクトにおいて行った福島県の「高齢、過疎化」についての考察を基に、広く南相馬市のPRを行うことが過疎化の打開策の突破口になるのではないかと考えた。また、今までのプロジェクトは対象地域へのアウトプットが少なかったが、今回対象地域の具体的PR案を提案するという課題解決型に発展させていくことで、地域への直接的なアウトプットの増大が期待される。

2. プロジェクトの目的

南相馬市のPRを県外に向けて広く行い、少しでも多くの人々が南相馬市を訪れることが過疎化の打開策になるのではないかと考え、まずは南相馬市の資源調査（まち/自然/環境、ひと）を実施する。その後、学生たちは南相馬市の有効な資源を洗い出し、全国の大学向けのPR媒体を制作する。それをきっかけに多くの学生が南相馬市を知り、来訪するきっかけになることを目指す。

同時に南相馬市の海岸線をドローンの練習場として提案できるかどうか調査を行い、ドローンの動画撮影をし、配信することも目指す。初心者や練習場所の確保の困難さにドローン操縦を断念している学生さらには一般市民に対し、練習の場を提供することで「ドローンの聖地」として南相馬市の認知度を上げ、リピーターの増加とそれに伴う企業の参入という相乗効果を狙う。

3. 参加学生 12名

4. プログラム概要

南相馬市のPRを県外に向けて広く行い、少しでも多くの人々が南相馬市を訪れることが過疎化の打開策になるのではないかと考え、まず、南相馬市の魅力ある資源(まち/自然/環境、ひと)の現地調査を2019年8月5日(月)~8月8日(木)に実施した。

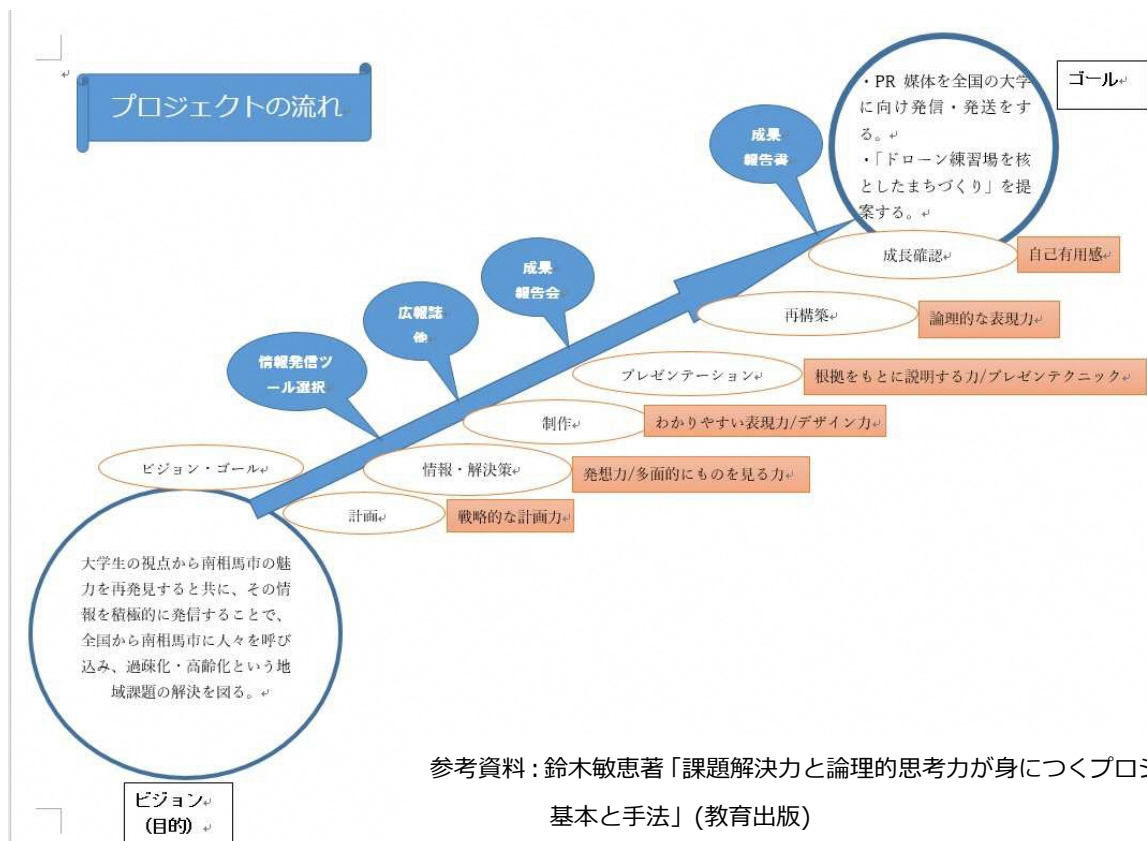
8月5日(月)は、東日本大震災で南相馬市がどのような被害を受け、現在どのような状況なのかを知るために、南相馬市観光ボランティアガイド岩橋光善氏に案内をしていただき、消防・防災センターや海岸沿いを周り、大悲山の杉などを見学した。

6日(火)は、広報チームとドローンチームとに分かれ、それぞれの取材対象の場所に赴いた。広報チームは野馬追の旗指物を作られている西内清実氏の工場を見学し、野馬追の歴史や旗について話を伺った。ドローンチームは雲雀ヶ原祭場でドローンの空撮を行った。その後2チーム合流し博物館で学芸員の方から旗について詳細な説明を聞いた後、ロボットテストフィールドで福島県イノベーションコースト構想について話を伺い、ドローン操縦体験と研究棟の見学をした。

7日(火)は、広報チームがひばり生涯学習センターで南相馬市食生活改善推進連絡協議会会長の渡辺純子氏のご指導の下、地元食材を使用したホッキ飯など郷土料理作りを行った。またドローンチームは相馬牧場前のひまわり畑に行き空撮を行った。その後は全員で野馬追伝承会の方たちと交流会を行い、野馬追の話や東日本大震災での体験などを聞く会を設けていたが、岩橋氏お一人のみの参加になり、質疑応答形式で学生が疑問に思ったことなどを質問する会になった。途中みなみそま復興大学の田中氏と茂木氏にお越しいただき、実際に撮影された野馬追の動画や旗を見せていただいた。

最終日の8日(水)は、復興大学シェアオフィスをお借りして、振り返りを行った。

8月下旬~3月上旬においては、南相馬市の過疎化対策のために、成蹊大学において学生を中心に議論を進めた後、広報チームは関係人口の増加を図るために南相馬市のパンフレットを作成し、500校の大学ボランティアセンターとその担当課に送付した。そしてドローンチームはSNSでのPRを図るため南相馬市の「野馬追」「食」「自然」「ダイジェスト版」の4本の動画を作成した。



参考資料: 鈴木敏恵著「課題解決力と論理的思考力が身につくプロジェクト学習の基本と手法」(教育出版)

5. 南相馬市資源調査の振り返りシートから

①南相馬市について、学んだことや気づいたこと、感想など

- ・高齢化率が45%と伺っていたが、それ以上に閑散としていた印象を受けた。
 - ・杉が津波の塩で枯れていたり震災の爪痕はまだ残っており、津波対策を進めてはいるが、まだまだ復興は完全には終わっていなかった。物質的な面だけでなく、震災の時のことがフラッシュバックしてしまうなど精神的被害も大きく、精神的な面でも復興していかなければいけないと強く感じた。また、福島県産というだけできちんと検査しているのに偏見が強く、売れないという現状を学んだ。
 - ・市にそれぞれ放射線を測定できる機械があるが、あくまで基準値であり出荷するにはまだ足りないことを知り、厳しい基準が使われているのにそのことがあまり知られていないことが残念に思いました。
 - ・元々の人口より震災後に戻ってきた人数が少ないことに加え、高齢化率も45%と高く、若い世代の多くの方が戻ってきてないことが伺えました。震災避難の際も高齢者の方々は移動が困難な方も多く、残らざるを得ない方も多くいたとのことで、避難勧告が出たとしても移動ができない方も多いいことを知りました。そのため物資の供給がストップしたと聞き驚きました。
 - ・防災センターで津波の高さが9.3mと実際の高さを見て驚いたのですが実際はメーターが振り切れていたためもっと高かったかもと言われさらに驚きました。津波の実感は全然わからないのですが、写真やガイドさんの「一時停止していなかったら流された」などの話を聞いてぞっとしました
 - ・野馬追の旗指物の話を伺った時、そもそも西内さんが続けていけないかもということ以前に原料である絹や染料などが手に入らなくなっているといった周りの現状も伝統技能に大きな影響を及ぼしていることを実感しました。旗の模様もオリジナルを使うのではなく、旗帳で遡って確認してと伝統を受け続けていく重みも感じました。また逆に震災の影響で蔵を壊したことなどによって家系図、旗が見つかって、旗を作って欲しいなどといった依頼も増えてきていることが驚きました。最近では野馬追を目当てに旗を作りに来たりする方も多くいらっしゃるそうです。協力者の旗を借りたいと言って伝統の旗を使うことにこだわっていると感じました。
- また、西内さんのお嫁さんが「旗を作っていたり、関係者として関わっていると野馬追は神事でもあるから大々的に観光！とも言えないのかな」とおっしゃっていた点が印象的でした。
- ・伝統文化は日本人自身よりも海外の方が関心を持ってくれる傾向があると考えている。そのため野馬追も海外の人にアピールして観光客を増やすという政策をとっているのかと思っていたが、行っていないように思えた。やはり伝統文化で南相馬市民は先祖から続く祭りを市民で守っていきたい、行っていききたいという意思が強いように感じた
 - ・もっと推すべき魅力がたくさんあると感じた。海岸線もそうだし野馬追博物館に隣接する公園もとても広報するには良い場所だと感じた。



・ホッキ貝のように福島特有の食材をもっと知りたいと思いました。海も山もあるので、豊富な食材があるのに風評被害で無駄になるのはもったいないと思いました。

・昔から続く伝統である野馬追がいかに地域の方々にとって重要な行事なのかについて学べました。また、多くの歴史も継承していて、祖先を尊敬していることが伝わりました。

②ロボットテストフィールドを訪問して「ドローンを核としたまちづくり」のヒントは？

・ロボットテストフィールドは企業や若い人を呼び込む上で非常に重要な施設なので、インフラがもっと整えばまちづくりの核になると感じた。その上でドローン企業の技術者がドローン教室をひらいたり、ドローンのまちとして有名になることで、日本中から人を呼び込めると思った。

学生向けとしてはドローン練習場が近くにある合宿所があればロボット部とかドローンレース部とかが来てくれると思った。

・ドローンをアミューズメント面でももっと活用して、企業のビジネスとしてではなく、エンターテインメントとしての方向性をもっと考える必要がありました。お話を伺ったところドローンを使うにあたっての制度は厳しめで日常的に一般の人々が使用するのは困難だと思いました。

・気軽に参加してもらうにはまだまだしなければいけないことが沢山あるなど感じた。主に中高生のロボット部に向けて宣伝するなどの取り組みや、VR、ドローン、災害を組み合わせた体験ができるとよいかと思った。

・施設管理や災害時に使用されるドローンの練習のためにロボテスがあるので、それらを“職業体験”として経験できるような体制を整えばPRやドローンで人を呼び込む材料になると思った

・農業でもIT農業の実験をされているとおっしゃっていたので、ドローンを使ったIT農場も設けることによって、新規の就労者も増えてまちづくりにもつながるかもしれないと考えました。



③南相馬市について過疎化・高齢化対策はどのようなことが必要か？

・若い人を多く市に呼び込む必要があると考えられる。そのとき元々いた住民を呼び戻すか新しい技術者やその家族を呼び込むかで対策は大きく変わるだろう。今回地元の現状や伝統文化、出向しに来ている企業の方など多くの視点から問題点を確認したが、やはり大規模に過疎化・高齢化の課題を解決するならば、広大な土地を活かして工場や試験場を作り若い技術者や社員を連れてくるのが必要と考えた。ここにインフラ整備や元々の住民の協力が加われば南相馬市は“ものづくりの町”として復興できるだろう。

・インフラの整備が一番必要なのかなと思いました。バスが走っている様子も見られなかったので、もっと交通の便をよくしないと他に移り住んだりしてしまう人も多くなりそうです。

また、高齢化が進む中、車の交通は思っていたより多く感じました。免許返納をしてしまうと移動手段がなくなるので高齢者も車の運転をし続けなくてはならない現状があります。また、交通の不便なところに住み続けるのは苦労も多いと思うし、大学なども近くなかったり飲食店など少なかったりすると他の地域に移り住む選択が増えてしまうと思われます。両方の問題の対応としてインフラ面の整備(バスだけでなく乗り合いタクシーなど)が課題だと考えます。

- ・ドローンを例とするような新しい産業を作り出す。
- ・人が増えれば町の機能もだんだんと出ていくだろう。大学がない、働く場所が無いことから、若い世代を南相馬市に留めることができないので、企業はもちろん教育機関も作る必要。
- ・東京ではしばしば待機児童が問題となり子どもがいても仕事と子育ての両立がしにくい時代だと

考えます。

そこで私は過疎化・高齢化対策として南相馬市で教育、保育の制度を充実させることで都心あたりから人をよびよせられるのではないかと考えました。今も行われている所もあるそうですが全面的に保育費の減額などを実施し、大々的に宣伝していく、その他にもこの町は電気系などの技術系の就職先が多くあるので電気系の大学を作るなどすれば（この町には今のところありませんが）今住んでいる若い層を取り込めるのではないかと考えました。

④南相馬市について過疎化・高齢化以外の課題は？

- ・“野馬追”を祭りとして広めようと考えている人たちと、神事として厳密に規則を作って執行しようとしている人たちがいて意識が分断されているように感じられた。どちらの言い分も正しく、どちらかに偏っても集客性や伝統性に悪影響を与えらると思った。誰でも参加してもよいような軽いイベントではないだろうが、あまり排他的になると市の他に広めていけないネックを課題と考えた。
- ・ロボテスの社員と地域住民の話を聞いて、まだ企業と住民の意識や距離感は一貫していないものと感じた。これを一致させることが上記の対策にも必要と考えた。
- ・野馬追の伝統の残し方が中途半端ではないかと思いました。行事で使う旗や装具の作り方まで含めて守らなければ、将来、元の野馬追と異なる外観やルールになりそうだなと思いました。

⑤今後南相馬市の復興のために何が必要か？また何をしたいと思うか？

- ・野馬追の魅力を多くの人に知ってもらうために IT 技術の利用をすることが必要だと思う。ロボットテストフィールドも企業のためだけの施設という役割だけではなく、その技術を利用した PR 活動が必要だと思う。
- ・ねぶた祭りも 2016 年から VR 動画を YouTube に UP しているため、PR 活動が必要。
- ・復興は市が潤うとかだけでなく地元の人々が元気になることが必要だと考えます。いろいろな人に訪れてもらって、町が活性化することも地元の人たちが元気に周りから忘れられていないと思えるのではないのでしょうか。そのためにもまずは南相馬市特に魅力である野馬追を多くの人に知ってもらうことが必要であると考えます。私は広報チームの一員として南相馬の現代の魅力である野馬追や豊かな自然(海やひまわり)など他の魅力も紹介していき、観光に行こうかななど興味を持ってもらいたいと思います。
- ・実際にここにきて話を聞くまでに知らなかったことが沢山あったので、広報活動だけでなく、南相馬市に来てもらうことが大切だなと思いました。復興大学に視察ルートがあったように、魅力が伝わるルートを使用する交通機関まで含めて考えて広めることでできればいいなと思います。
- ・新しい人を呼び込む手段としてドローン産業やロボット産業を盛んにし、若い人の働き所を根付かせる。
- ・まずは住民の意見・理解が必要だと考えます。昨日お店の人にお話を伺ったとき、これまでの話を聞いてきた方たちとは視点が違い、このままだと町がつぶれてしまうみたいな発言が印象的でした。ロボットテストフィールドの人、地元の人、野馬追の人ではそれぞれ危機感に差があるように感じました。



5. チーム別活動について

○広報チーム 6名

目標：南相馬市は学生に対し様々な補助金や活動しやすい助成を行っている。しかしながらそれを知っている大学は多いとは言えないだろう。そこで、南相馬市の PR パンフレットを作成し、500校の大学ボランティアセンターとその担当課に送付し、スタディツアーや合宿での利用により関係人口の増加を図る。

結果：パンフレットと南相馬市で活動する際に利用できる情報一覧「南相馬市で活動するためのお得情報」を473大学に送付した。

○ドローンチーム 6名

目標：南相馬市を広く紹介するため、動画を作成し SNS で PR を図る。

結果：SNS での PR を図るため南相馬市の「野馬追」「食」「自然」「ダイジェスト版」の4本の動画を作成し Twitter と Instagram に掲載した。ちなみに「ダイジェスト版」は本センターTwitter の掲載中最多いいね！を獲得している。

Twitter https://twitter.com/seikei_vc

Instagram [tohoku_project2019](#)

6. 南相馬市への事業提案

南相馬市での活動後、私たちは過疎化を打開するために「南相馬市をドローンの聖地にして関係人口を増加するにはどうすればよいか」を考えた。

南相馬市は福島イノベーションコースト構想に基づき、ロボットテストフィールドが設立されているが、ロボット事業の最先端という環境でありながら、「その強みをアピールできていない」と思われる。

ドローン市場関連は急速に成長しており、多岐にわたる分野でドローンの活用が広がっている。その反面、ドローンを飛行するための法規制は年々厳しくなっている。特に「人または物件との間に30メートル以上の距離を保って飛行させる」という飛行ルールに適合する場所はあまりない。そのドローン飛行に適した場所が南相馬市だ。

ドローンに興味があっても「どうやって飛ばすのかわからない」「飛ばすところがない」とドローン操縦をあきらめている人は多く、市場が求めるほどドローン操縦者の裾野は広がっていないと考えられる。そこで南相馬市に行けばドローンを飛行することができること、ドローンに関する様々な取り組みが行われていること、そしてロボットテストフィールドでは最先端の技術を研究していることなどを広く周知し、「南相馬市＝ドローンの聖地」のイメージを定着することが必要不可欠だと考える。そのことにより、ロボット関連事業者の誘致や人材の流入で関係人口が増加し、町の活性化につながっていくだろう。

そこで、南相馬市をドローンの聖地としてアピールし、イメージの定着の一助となるためにいくつかのアイデアを提案する。

①ドローンを活用した事業提案

②廃校を利用したドローン学習事業と宿泊施設

①に関しては、観光地での記念写真撮影をドローン空撮で行う事業とバイクの走行をドローンで撮影するという2つの事業提案で、ドローンでの記念動画を撮るために南相馬市に訪れる人を増やす目的で考えている。

②はドローンに興味があっても高い講習料や飛行する場所がないといった問題から、ドローンを

飛ばすことをあきらめている人向けに、安価な設定で講習が受けられるドローン講習や子供向けにプログラミングから覚えられるドローン学習を、廃校を利用して行おうという提案だ。施設の一部に宿泊できるところを設け、食事は地元の農家が作ったブランド野菜や水産物を提供し、All 南相馬をアピールすることを考えている。

※詳細は動画を見てください。

7. 今後の南相馬市

今回、南相馬市はロボット事業の最先端という環境でありながら、その強みをアピールできていないという点に注目し、南相馬市を「ドローンの聖地」としてアピールするいくつかのアイデアを提案した。大分県は「おんせん県おおいた」という統一イメージを浸透させ地域ブランドを活用した大分県ブランド力を向上させている。南相馬市も今後戦略的広報を行う必要があるのではないだろうか。

しかしながら、ここで足りないもの、言い換えれば課題があると考えられる。それは、おもてなしの心である。

南相馬市を訪問し、ホテル、コンビニ、郵便局などに行ったが、どこに行っても対応する方の愛想のなさにがっかりした。鹿島区のおしゃれなカフェも口コミではひどい評判であった。地元の人しか利用しない商業施設であればそれでよいかもしれないが、今後外部の人に沢山訪れてもらい、南相馬市に愛着を持ったリピーターを増やしたいと望むのであれば、住民の意識改革とサービスマナーを学ぶことが不可欠ではないかと思う。